



各地で行われている農家の情報活動

尾崎 正利

(よかネットNO.42 1999.11)

- 3 農業振興

最近、一般の雑誌などで農業をテーマにした特集記事を見かける。共通しているのは、個人経営者として都市部や集落内、他の地域に様々な独自の人のつながりや情報の窓口を作っている人が多く紹介されていることである。第59回地域ゼミでは、農村と都市の情報交流と経済活動に注目しようということで、農山漁村の産業や人々の暮らしをテーマに出版や情報発信を手がける、(社)農山漁村文化協会(以下、農文協)の九州・沖縄支部事務局長の高群正春さんにお話をお願いした。

農文協には「どぶろくを作ろう」(前田俊彦氏)、「諸国どぶろく宝典」(貝原浩氏、共著)などの本で、私もお世話になっている。

8月24日のゼミの当日は、陶芸家、最近百姓になったという新参就農者、農政や商工関係の部署に所属する自治体職員、遠くは県外から駆けつけた女性、雑誌編集者などの顔ぶれがみられた。

以下では高群さんのお話の概要をとりまとめた。

「郵便局か農文協」か、と讃えられる“行商”方式

- ・農文協は昭和15年、農林省の外郭団体として発足。初代会長は有馬頼寧さん(元久留米藩の当主筋にあたる)で、戦時中には当時、農村で慰問劇団(瑞穂劇団)を手がけていた宇野重吉さんがその任についていた。
- ・戦時中は、国の食糧増産体制を推進するための作付けや農作業の指導等を行っていたが、戦後、昭和22年に再建し、農村の生活や人々の健康の向上、生産技術の啓蒙を目的とする事業を展開し、その中で「農村文化」など出版を中心とする活動をはじめた。
- ・全国に出版社は3千社あるが、農文協は平成10年度の売り上げ額は約60億円で100位、出版点数では80位に位置する。普通ベストセラーといわれる本でも東京・名古屋・大阪の大都市圏で半分以上を稼ぐのが出版市場であるが、農文協

の場合、売り上げの6割は地方の直接ユーザー販売(各地の農漁家や農漁業など)で占めている。

- ・地方ユーザーの開拓には、営業と地域情報の収集に日夜とりくむ、農文協ならではの“普及活動”の役割が大きい。
- ・この“普及活動”のために全国で117台の500Cのカブが用意されて、普及部隊が文字通り「人の住んでいるところはどこまでも」津々浦々を毎日25軒、農家、農協、役場、農業高校、改良普及所を中心に訪ね回っている。
- ・道路網が整備される前は、班を組んで一軒一軒、農家を泊まり歩く自炊型の普及活動も行っていった(ちなみに高群さんも20数年前、椎葉に行き、「よかネット」で何度か取り上げている椎葉秀行・クニ子夫妻に普及したことがある、という)。
- ・津々浦々に行くため泊まりがけの遠征をすることはしばしばあるが、少ないコストで最大限うまいメシを食べられる旅籠の情報リストは普及部隊の財産として受け継がれている。
- ・今時そんな営業活動は「田舎では郵便局と農文協だけ」という声もあるが、これは農文協の誇りにもなっている。最近の新入職員には、パワーのある女性も増えてきた。1年通して50ccのバイクで地方を行商する、かなりハードな仕事にやり甲斐を見出して、張り切って出かけていく。
- ・普及部隊が集める情報は、取材や制作・企画に集約されて、新しい誌面づくりに生かされる。農文協では、その他の事業部門として、文化活動(食と健康を考える会など)、教育活動(食と農を教育に)を行っている。
「革靴姿では話かけない」「農作業は手伝う」これが農村における情報収集の秘訣
- ・農業は土を耕すことが生業の基礎だから、普及活動では、そうした農家の方との出会いにおい

て、こちらの身なりで受け取られ方が大分違って来る。スーツに身を包みきれいな革靴をはいて道路の上から話しかけてもまず相手にしてもらえない。雨靴と雨合羽で土に足を踏み入れることで、うち解けた話ができるきっかけとなることが多い。

- ・ 繁農期では、こちらの商売とはいえ、農家の作業の手を止めさせるわけにはいかない。例えば、稲刈り時期には機械で刈っている最中は話しかけない。田圃の四角で機械が方向転換する時を見計らって「精が出ますね。一息どうですか」とやると、グッと和んだ雰囲気ができる。ついでに稲刈りまで手伝っていくと、まず間違いなく話を聞き入れてくれる。
- ・ 以前は、普及活動ついでに畑仕事を手伝い、一緒に農作業を終えると、集落の集いに誘われ酒を振る舞われ、その場で即興の踊りを披露するなど田舎のドサまわり役者のようなことまでやっていた。
農村の情報化が進む。リアルタイムの通信技術が都市・農村の双方の情報交流を可能に
- ・ 農文協は、本屋とのオンラインシステムを出版業界でも特に早い時期に取り入れてきたが、最近では全職員がノート型パソコンを持ち歩いている。普及部隊も50ccのバイクに積んで回っている。これを使って、全国各地の農村で動きまわる普及部隊が電子メールで本部(東京赤坂)に日報を毎日送っている。
- ・ 「私はここでこういう話をしました」「誰それは ○に関心を持っています」「××について聞かれました」など日々の農山村の人々の関心を事細かに送っている。これが一晩で集約され、翌朝、全員が全国どこからでも見られるようになっていて、問題解決や情報サービスに役立てるやりとりにもまでシステム化している。こうした些細な情報は次の取材、制作のネタさがしに

もつながっていく。

- ・ その他、全国3千以上の市町村の農業データ、朝市情報データ、農産品データなどをデータベース化し、一部をCD-ROM化して、出先でパソコンを一緒にみながら問題提起を行うこともある。
- ・ 一般向けには、ルーラルネットというホームページを開設しており、農家同士の技術情報交流や農業関連の図書情報、教育や文化交流情報などが掲載されている。これで“ドブロク”や“朝市”などのキーワードで検索すれば、全国のドブロク情報、朝市情報などもわかり、関連図書の紹介もしている。
- ・ こうした動きは、田舎の方で産地情報や技術情報、都会の人のニーズなど、農業経営に重要な情報を積極的に得ようとする人が増えてきたこともよる。後継者のいない、おじいちゃん、おばあちゃんが披露する農業技術でも、個人情報のネットワークで様々な人が受け継ぐことができるようになってきている。
- ・ こうした仕事の集大成の例として、制作・出版に13年かけた日本の食生活全集(各都道府県+アイヌ編、辞典含めて全50巻)の事業がある。各県、3年程度かけて、各地の農村・漁村・都市の高齢者に取材し、大正末期から昭和初期の頃の日常の食事が紹介されている。特殊な郷土料理のレシピではなく、日々の食生活の姿を通して地域文化を語り継ぐ思い出絵巻ができた。医・食・農・想の思想をもって高齢社会を乗り切ろう
- ・ 平成10年、新規就農者は全国で10万人。その6割が55歳以上の人になっている。業態としての体力勝負の農業でなく、自分の体力で身の丈に合った“チンタラ型”といえるペースで始める人も増えてきた。
- ・ 食べ物や自然環境に対して、子供、お年寄り、女性が一番敏感である。だから生活者に対する

農業の役割「医・食・農・想」(健康・食べもの・農法・考え方)による捉え方が重要になるのではないか。

- ・農村と都市は対立の概念で捉えられることが多いが、最近の都市と農村の情報の相互交流をみると、それぞれに属する生活環境や職業が違う人たちが、お互いに触れ合って共生しようとしているようにも見える。これからは情報の結びつきを、人の結びつきにまで高めることがポイントになるのではないか。

都市の人同士の様々な農山村の情報交流に

お話の途中にも出席者の間で様々な意見や質問が出て、その中にはテーマとして追求しても楽しそうなものもあった。これは日を改めて私が連絡係をする2農8サラの会で検討してはどうかとも思った。以下、出された意見を一渡り整理してみた。

- ・「金なし暇ありの高齢者にとって、自給生産だけしとけば金は節約できるから百姓が一番いい生活になる。金を稼がなくても暮らせる程度の百姓をやりたい」
- ・「農業はいいが子供の頃の経験からいえば楽ではない。新規就農の失敗事例の研究も知りたい」
- ・「農を特集する雑誌も増えて来てきたが、一般市民に向けた情報も、きっかけづくりのミーハー型で良いのではないか」
- ・「認定農家の認定は生産額だけでなく、どれだけ情報を出しているか、都会の人間を引っ張っているか、など経営の特徴に合わせてやれないものか」
- ・「その昔、農文協の本で複合経営の話が出ていて、杉の植林をせず、雑木林で炭焼きや椎茸をする複合経営を目指している林業の村の話があった。一攫千金型でない、自然を無理なく生かす、土地柄に合った経営は、結局どの産業でも着実な結果を得るベースになっている」

個人農家が情報活動

水車小屋祭りに300人が集まった

豚一頭の丸焼きを見て熱い胸騒ぎ

高群さん(農文協九州・沖縄支部)にゼミでお話をうかがう前の8月10日、私は高群さんのお誘いで宮崎県の山田町に遊びに行った。「第2回水車小屋祭り」という案内状を頂いていたのだ。

うたい文句として、1.豚の丸焼き、2.合鴨たたき、3.鴨鍋、4.講演(萬田英美さん。宮崎県綾町で農業をされて、全国合鴨水稲会事務局)、5.踊り(藤間流山田町支部、演目:二輪そうなど)、6.大正琴(琴峯美会、演目:さくら貝の歌、旅愁、炭坑節、軍歌)、7.水車越しに眺める町の花火大会、8.花火の後に焼酎片手の交流会、とあって、その後は、女性は町の温泉施設に泊まり、男性は“その場で野宿”と書いてあった。

8月10日、飛行機と車で福岡からはるばる4時間かけて、祭りの会場である地元の農家、吉見幸男・カツ子ご夫妻の庭に着いた。庭といっても千坪近くありそうな広さである。庭に入って驚いたのは、受付があってまず祭りの参加者の記帳をしていたこと。そして子豚が一頭丸々“ひらき”の状態でたき火の上で回っていた。塩をベースとする特性の調味料に1昼夜漬け込んだのち、8時間かけて丸焼きにされている。そのアメ色の焼き色からみて、仕上げの段階にあるようだ。

一軒の農家の水車小屋の祭りに300人以上の人が各地から訪れに

吉見さんご夫妻は全国の農家のうち、かなり早い時期から合鴨農法で米づくりに取り組んできた農家として知られる。また、庭に水車小屋があって、動力をもって石臼、オルガン演奏などもやっているが、その水車は日本水車協会の研究対象に



祭りの30分くらい前の様子。銚子に焼けて水車の動力で直火の上を回ってグリルされている。

もなっているという。この祭りにもその協会に関係する建築関係の先生方がお見えであった。

祭りは夕方5時に、宮崎大学農学部動物生産学科の園田立信教授と研究室の学生さんたちが取り仕切って、子豚レースや合鴨レースなどから始まった。

庭のそこかしこで参加者が選果用のプラスチックの箱を逆さまにして板を乗せて、机とイスにしている。合鴨のたたき、鍋、子豚の丸焼き、キビ飯などが振る舞われ、来ていたお客さんはこれをつまんでいたが、催しものの踊りと歌がはじまる8時過ぎに辺りをみると、かなり人出があって300人以上は確実にいた。

実はこの時まで、私は山田町が町主催の祭りをご夫妻の庭を借りてやっているのだと思っていた。しかし、近所の人に聞くとそうではなかった。吉見さんご夫妻が主催し、近所の養豚場の方やトウモロコシ農家などが協力したほとんど個人主催というような感謝祭だという。そしてお客さんは、近所の人も多いのだが、名古屋から来た小学校の校長先生や、宮崎大の農学部の先生、北九州から来た水車研究家、山田町に活動拠点をもつライモ交流財団の理事など、様々な人がいた。それらの人々は一応、吉見さんご夫妻やその仲間たちと、何らかの関係をもつネットワークだという。何となくはじめての“記帳”の意味が少し分かったような気がした。この農園は既に各地に独自のファンを持っているのだ。農業経営としての吉見ご夫妻は、合鴨米、畜産（豚）、合鴨、薩摩芋などを出荷し、個人向けで全国各地にも販売しているというが、水車や合鴨農法などで独自の人のつながりをもっているということだろう。

人が最も多くなったとき、このご夫妻は全ての



デジカメによる個人のスナップがあって、見るたびに思い出させる。旅の思い出時間延長の効果抜群！

テーブルを回ってお客にご挨拶し、一杯ずつ焼酎をすすめては記念ですからといってデジタルカメラで撮影して回っていた。

デジカメによるお便りに感激

祭りが終わって福岡に帰り、早速お礼の手紙をお送りしたところ、すぐに返事のお手紙をいただいた。開けて驚いた。お礼の文面なのだが、それが私と高群さんが並んだ写真に書かれている。あの時のデジタルカメラによることは明らかなのだが、こうしてご夫妻は一軒ずつ個別の返事をお送りされているのだろうか。

手紙の文面には「三年に一度の祭りは楽しみです。百姓も楽しみなしにはくたびれてしまいます」と書かれてあった。合鴨農法や水車関係の集いで自らも頻繁に福岡などにも頻繁に出向いているとのこと。都会の情報の仕入れも熱心に行っておられるのだろう。

来た人に喜びの時間を持続させてくれる農家の方に会って、とても印象に残る旅だった。